

油井 恵 言語とアイデンティティ

個人の言語意識とアイデンティティ形成のプロセスは密接な関係を持つ。特に使用言語が複数の言語にわたる場合、その関係性を意識的に捉えることはアイデンティティ形成を理解することにとって有意義であると考えられる。

認知言語学的に言えば、日本（語）人の「日本は単一言語国家である」という（あるいはだから他の国もそうだろう、という）少々お気楽な基本認識は「母国語」という語に如実に表れているが、第一言語あるいは「母語」は自己のアイデンティティに大きな影響を及ぼす。これには地域ならびに社会方言も大きく関わる。

これに別の言語が加わると、事態はさらに複雑化する。日本においては、殆どの場合において外国語という扱いになるが、習熟の度合いや状況によってそれは第二言語ともなり得る。学習者という受容的存在が、言語を内在化させるに従って言語の主体的使用者となり得るからである。そうなるかどうかというのは、認知的な負担が高く抽象的な思考に必要な学習言語としてその言語に接したか、あるいはそれを習得したかというのが一つの大きな基準となろう。それは異文化リテラシーの涵養に繋がり、ひいては個人の中の複文化性となって、物事の多様な捉え方に資すると考えられる。学習言語の習得を通じて、その言語文化の考え方や価値観がよりよく理解できるし、またそれは第一言語を客観的に眺める「気付き」への一助となる可能性も高い。その意味では、自覚しているかどうかは別にしても、バイリンガルであることは単なる言語の問題ではない、という事実は当然のこととは言え、強調し過ぎることはない。

個人の言語生活に二つ以上の言語が関わってくるのは本人の決断によるものばかりではない。国際結婚や移民の子どもたちもその当事者である。第一言語と社会における言語、更には例えば親の別の言語（継承語）まで関わってくる場合もある。その際、何を通常使用する語とするか、というのは言語の政治的・経済的地位が大きな影響を及ぼすことが多い。言語に優劣はないが、言語は本質的に権力としての側面を持つ。何を自分の主要言語とするかは一生の社会生活に関わるのだ。

身体的・精神的・社会的な要素と言語が絡み合うとき、アイデンティティ構築はより複雑なプロセスとなる。その際、言語自体に潜む文法化された物事への視点、名詞など名づけに表れる文化的認識も、個人の価値観やモノの見方に作用する可能性が高い。

こうした様々のことが全て個人のアイデンティティに繋がる。自身の認識だけでなく、

社会の中、また相手との関係性の中で作られるアイデンティティは一つとは限らず、複合アイデンティティ、加えて多元的なアイデンティティ管理リテラシーという概念の導入が有効と考えられるが、それと言語あるいは言語意識との関係性を意識することは、言語が人間の自己認知にどのように影響を及ぼしているかを考察することに有益であると考えられる。